

【随筆】

釧路の冬

住吉 尚

(釧路支部)

12月4日(水)、今日は快晴ですが強風が吹き荒れていて、気温は3℃か4℃ぐらいでしょうか。ニュースによれば道内の一部では小学校が休校になるほどの吹雪だとか。先週の土曜日は遊びに行くには絶好の天気だったのですが、釧路学教養講座でタンチョウのお話を依頼されていましたが、夜には忘年会もあって遊びには行けませんでした。「ならば日曜日に!」と意気込んで、釣りの準備をしていましたが土曜日の疲れでしょうか?体が重く一日寝ていました。「それでは」と勇んでみましたが、月曜日は天気が悪くてダメ。火曜日は強風が吹くと言う予報でした。

今朝、食事が終わっても天候は良く、さほど風が強くないので、「風が強くなるまでの間だけでも」と釣りに出かけました。釣り場まで1時間。着いて準備をして釣り始めるとやはり予報通りに風が強くなり始め、40分後には「釣りどころではない」と言うほどの風が。止むを得ません。釣りを止めて帰路に。今年は私が釣りに行こうかな~!と思うと風が強い日が多く、不満がたまればかりです。

そんな中ですが、今年も庭にバードテーブルを出しました。スズメ用の餌台とヒマワリを入れたペットボトルです。今年はペットボトルのヒマワリの実を取り出す穴が少し小さかったのか、シジュウカラが飛来してもなかなか取り出せないようです。穴の大きさを少し大きくしようかと思いましたが、今度はヤマガラが飛来しました。ヤマガラが我が家に飛来したのは2012年以来ですから、7年ぶりと言うことになります。ヤマガラが珍しい?なんて皆さんは思うのでしょうかね。ヤマガラは帯広までは普通にいる鳥ですが、釧路・根室では珍しい鳥なのです。この日は2羽のヤマガラ、4羽のシジュウカラ、2羽のゴジュウカラ、そして1羽のハシブトガラの混群です。カラ類はこのような何種類かが集まって群れを作って、冬を過ごしていることが多いようです。ヤマガラの行動を見て気づきました。似たような種類でも微妙に違いがあり、それぞれに合った食べ物を探しているのでしょう。私が作ったペットボトルのヒマワリの実を取り



ヤマガラ

出す穴は少し小さいので、取り出すには力が要るようです。シジュウカラはチャレンジするのですが、取り出せないでいます。体がシジュウカラよりほんの少し大きなヤマガラは、この穴からヒマワリの実を取り出し食べています。この2種は体つきも嘴の形も大変よく似ているので、似たような生活をしているのでしょうか。でも体が少し大きなヤマガラの方は力が強く、無理やりにも穴からヒマワリの実を取り出すことができるのでしょうか。両者が混ざって暮らしているところではヤマガラの方が優位に立っているのかもしれませんがね。でもなぜかシジュウカラの方が寒さには強いようです。もしかしたら小さいことでの有利な餌の取り方もあるのかもしれませんがね。一方、ゴジュウカラはこの2種よりずっと長く尖った嘴をしています。この長い嘴で樹皮のしわの中深くに隠れている昆虫などをつまみ出したり、キツツキのように枯れ木をつついて中の虫を取ったりできるので、同じ群れで移動していてもシジュウカラとは餌をめぐる競争しないのでしょうか。ヒマワリの実もヤマガラやシジュウカラが足で押さえてつつき割るのとは違い、ゴジュウカラは石の割れ目や木の股などに種を挟んでつつき割るという違いがあります。さてハシブトガラの方ですがどのカラ類より短く小さな嘴をしているように見えます。この嘴が狙っている餌は何でしょうか?シジュウカラより有利な条件であるのでしょうか?これは私にはまだ分かりません。でもみんなこの寒い道東で元気に暮らしているのですから何かあるのでしょうか。この日はカラ類のほかにヒヨドリ、シメ、ツグミが庭に飛来しましたが、これらの鳥用の餌がないのですぐに飛び去りました。シメはペットボトルからヒマワリを取って食べるのですが、こちらは巨大な嘴をしているのでよほど大きな穴をあけてやらねば食べられません。こんな様子を見て、ヒマワ



ゴジュウカラ



スラリータンク



ハシブトガラ

り用のペットボトルの穴を大きくしてみました。今度はどうでしょうか。ただ少し頑張って努力しないと食べられないぐらいが良いのではと、私は思っているのですが。鳥同士では「あそこの家はケチクサイ」と噂されているのでしょうか。

話は変わりますが、教養講座でタンチョウのお話をすることになり、改めてタンチョウについて考えてみました。ツルの寿命と言うのは一般の人には興味がある話題ですが、タンチョウの死亡原因は事故死が多く、寿命が来て死ぬという事はまれなようです。もっとも野生動物なら皆同じようなものかもしれませんがね。タンチョウの事故で最も多いのは衝突死ですが、電線などに自分からぶつかって行って死ぬのが今でも一番多いようです。でも列車や車にぶつけられるという事故は年々増加しています。これはタンチョウの個体数が増加しているうえ、農家などに居付いている個体が増えたので、農道上をうろうろしている個体が、車にはねられるというケースが多いからです。そして最近急増している事故はスラリータ

ンクへの飛来事故です。今年に入って10月までで30例にもなるのだとか。10月だけで8例あり、その内5例は無事救出して放鳥したと聞きました。スラリータンク？どんなものか知っていますか？これは酪農家が牛の糞尿を液体として処理するため、貯めて置くタンクのことです。乳用牛は糞の水分量が多く堆肥化するのが難しく、しかも道東では気温が低く発酵も遅いので、水分量の多い部分はできるだけ液体として処理しています。特に別海町や浜中町などでは、農家が大規模化するとともに、とても大きなスラリータンクができています。直径が30 m以上もあるタンクで、深さは4 m以上もあるのでしょうか。ここに糞尿を貯めていくのですが、表面には軽い糞成分が凸凹して皮膜のようにもなっていることも多く、タンチョウから見るとただの湿った地面に見えるのでしょうか？一度に家族全員が落ちると言うことが多いのもこの事故の特徴です。農家はタンクを毎日のようにチェックしているわけではありません。しかも最近ではこれらの施設が居住スペースから離れた場所にできることも多く、気づかないうちにタンチョウが落ち、糞尿まみれになって死んでいるのがしばらくして発見される、と言うケースが多いようです。10月はそろそろ冬に備えて農家は糞尿を草地に散布する時期です。作業のためタンク周辺に近づく機会が増えるということも発見が早かった原因かもしれません。救出した5羽のタンチョウの体を洗い、足輪を付けて放鳥したと言います。5羽のうち3羽はヒナ1羽を連れた家族で、もう2羽はペアだったとか。このタンクは大変大きなものですから、タンチョウが落ちないように簡単に何かをするということもできず、今のところは「手の打ちようがない」と言う状況です。同じタンクに何度も落ちると言う状況があれば、何か手を打たねばなりません。「ここは危ないよ！」とタンチョ

ウに教える方法を考えるのも、タンチョウ保護にかかわる者の務めかも！とも思いますが、今のところ良い案が浮かびません。「あれは恐ろしいものだ！」とタンチョウが学習してくれると良いのですが、これには時間がかかるでしょう。中規模のタンクの写真を載せてみました。11月下旬の写真で、これからひと冬分の糞尿を貯めねばなりませんから空の状態でした。空なら深いので気を付けるのでしょうかね。

5年ほど前のことです。浦幌に住む友人に「ハクガンが来ている！」との話を聞きました。十勝川下流部、私が最初にハクガンを見たのは十勝川の河口橋のすぐ近くの畑の中でした。手前にはヒシクイやマガンが、そしてその向こう、はるか遠くのデントコーンの刈り採り後に白い鳥がちらほら、と言う感じでした。それが昨年には数百羽のハクガンが群れ飛んで、空が白く見えるほどでした。ところが今年はさらにその数倍、1,500羽を越すほどの大群だとか。ハクガンは世界的には数が少ない鳥ではありません。そしてそのほとんどが北極海に浮かぶウランゲル島と言う島で繁殖をしています。このハクガンの大部分はアラスカからアメリカ大陸を南下して越冬します。でもなぜかその一部がカムチャッカ半島から千島列島沿いに南下し日本の本州で越冬するようになりました。ガンの仲間は親が子を連れて渡りをします。子供は親と一緒に渡ることによって渡りのコースを覚えるのです。そのため日本に渡るガンの種類を増やそうとしたときは、日本に渡る種類のガンに卵を預けて仮親が渡りをするコースを覚えさせるということもやられました。その時のプロジェクトにハクガンが入っていたかどうかまでは私は知りませんが、シジュウカラガンでは行われた、と記憶しています。シジュウカラガンも年々飛来数が増えています、ハクガンの増加はすごいですね。これは越



ハクガンの群れ

冬地である日本が彼らにとって大変良い場所だ、との評価をしているということでしょうから、大いに自慢しても良いのではないのでしょうか。でもハクガンやシジュウカラガンはなぜか釧路を飛び越えて十勝川河口部へ行き、そのあと本州中部で越冬し、来年の春先には再び十勝に現れます。

渡り鳥は種類によって、どこに渡るか？の決め方に違いがあります。ガンやツルなどはヒナには何も知らされおらず、親に付いていくことで覚えていくという方法をとっています。でも鳥の種類によっては親と一緒に渡らないものも多いのです。これは人から聞いた話ですが、イギリスで絶滅したミサゴを復活させようと、東ヨーロッパから卵を導入し、大きくなったヒナを放したところ、その全てがイギリスから南西に飛び立ち、二度と見つけることはできなかつたとか。イギリスの南西は大西洋の最も広い場所で彼らを迎える陸地はありません。彼らの元々の繁殖地では、秋が来ると南西に飛んで地中海を越え、アフリカ大陸で越冬するのだとか。このことからミサゴでは渡りのルートが卵にインプットされているということでしょう。でも別の決め方で渡る鳥もいますよね。このように渡り鳥の世界は不思議がいっぱいです。最近では多くの生き物で遺伝子情報のすべてが判ってきています。鳥の渡りがこの情報の中にあるのでしょうか？はたまた別の方法で伝えられているのでしょうか？

〈句題〉新年会

「老人クラブ
話かわらぬ新年会」

「老うたびに
口は達者な新年会」

「少しづつ
馴染みかわれる
新年会」



(室蘭市 白波瀬 稔歳)